

四郷初耳話

歴史の香り漂う四郷を巡れば、
そこかしこに先人の息遣いを感じ
る品々や物語が眠っています。



浦野家旧蔵の 「長篠・長久手合戦図屏風」

長篠合戦は天正3年（1575）に三河国の長篠・設楽原（現在の新城市）において織田信長・徳川家康の連合軍が武田勝頼軍を鉄砲隊で打ち破った戦いである。小牧・長久手の戦いは織田信長の後継を巡り天正12年（1584）に羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康の間で繰り広げられた。両戦を一对で描いた「長篠・長久手合戦図屏風」は尾張藩付け家老であった犬山の成瀬家に伝わったもの（成瀬本）が有名で、江戸時代、多くの大名が写本を作成した。その一つ、浦野家旧蔵の屏風は寺部を治めた渡邊家ゆかりのもので、成瀬家から渡邊家の養子となった女性が孝母藩の御用達を務めた浦野家に嫁いだ際、嫁入り道具として持参したと伝わる。

特徴は成瀬本の忠実な模写ではなく、槍の使い手として名を馳せた渡邊半蔵守綱の活躍が強調されている点だ。



浦野酒造

歩けば、四郷の魅力が見えてくる
四郷ぶらりまち散歩

下古屋

■お嶽山散策路（四郷町西山）

かつて御嶽社が祀られていたことからお嶽山と呼ばれる。梅坪城があったのではないかとという説もある。

明治末期、地元住民により88の祠が造られ、弘法さんの石仏を安置したことから「弘法山」とも呼ばれるようになった。麓には本堂が造られ、浦野氏一族により親弘法像3体も祭られ、弘法様の命日には祭りが行われ多くの人で賑わった。

第2次世界大戦中には戦

闘機が隠され、整備器具などを入れる横穴があちこちに掘られていたという。

戦後は荒れた時期もあったが、現在は散策路やベンチが整備され、地元住民の憩いの場、里山として親しまれている。



■弁財天の石碑（四郷町宮下河原）

その昔、龍川の氾濫が起きた際にこの地に流れ着いた石碑を祭ったのではないかとと言われる。かつて、現・トヨタ紡織狼投工場西の池に祭ってあった弁才天との説もある。



■旧飯田街道と秋葉山常夜燈（四郷町下古屋）

静岡県秋葉山は「火防（火伏）の神」として知られ、江戸時代になると民衆が参拝するようになった。下古屋・秋葉山常夜燈は浦野酒造の南側を東西に走る旧・飯田街道沿いに立つ。文政2年（1819）10月吉日の建立とあり、旧・飯田街道の道筋を今に伝えるものとして歴史的価値が高い。



■道満さんの祠（四郷町下古屋）

戦国時代、広瀬城主・三宅右衛門高信らに大学という息子がいた。彼は自らを三宅道満と名乗り花本に居を構えていたが、やがて人を傷つけたり殺めたりしたため捕らえられ、斬首される。道満を哀れに思った村の衆が首を花本、胴体は下古屋に祠を造り、葬ったと伝わる。令和2年（2020）に現在の位置に移され、毎年12月に供養祭が営まれている。



させき 左隻					ろつきよくいっそう 六曲一双					うせき 右隻				
左隻第六扇	五	四	三	二	左隻第六扇	右隻第六扇	五	四	三	二	右隻第六扇	五	四	三

豊田市指定文化財「長篠・長久手合戦図屏風」
（浦野家旧蔵、現在は豊田市博物館所蔵）

作者不詳

「六曲一双」縦156.1cm×横350.8cm

左／長久手合戦、右／長篠合戦

<渡邊半蔵守綱>

渡邊半蔵守綱は槍の名手として知られ、家康から「槍の半蔵」の異名をもらい、徳川十六将に数えられた。家康が天下を平定した後は尾張藩主徳川義直に仕え、幕府と尾張藩から領地を与えられる。以後、渡邊家が寺部を治めた。ちなみに、鞍ヶ池（岩滝町）は渡邊家の2代重綱が灌漑用のため池として造らせたもので、池が完成したときに重綱が馬の鞍を投げ入れたことがその名の由来といわれている。



			三月廿五日	御泊
			御茶	猪口
			御菓子	大根 おろし
				皿 ちん皮 焼味噌 草の
				生が
				御蕎麦
			皿 いか めあへ	平 蓮根 大椎茸 鯛
				御吸物
				こち めうかたけ
			御酒碗蓋	小くし 皮たけ かまぼこ れんこん 花玉子
			同御夜食	
			猪口	三ツ葉 したし物 平 （ぼら） 名よし 焼とうふ
				椎茸 砂糖餅
			同廿六日	朝
			皿 山うど 白あへ	焼とうふ はんぺん 汁 小椎茸 干大根 青味
				手塩香の物
			平 すゞき わらひ 長芋 ふき	干瓢 竹の子 皮たけ 御飯 引而 鯛浜焼

献立表



伊能忠敬

A black and white portrait of a man with a full, white beard and mustache, wearing a dark suit and a white shirt with a bow tie. The portrait is enclosed in an oval frame.

板垣退助

拜啓 陳近は老生貴地訪遊之際は御勤待を被り有難恩謝致し候 今只諸地へ食事參着 此間は休陣可候 尚ほ老生の勢に諸君に求むるものものは國家為此際民生の勢力を擴張して大に將來の議會二向て其志望を達する様 乞尽力あらんと耐す希矣する時、表可空料、我が國家の爲、折角御要用狂を萬にも行つと勿々宜す。

二月 板垣退助
浦野錠平殿

尚お、貴地錠君へも御養擦に為可無だなれども行も省り見ず、この際貴家より明日故、御伝聞の程を呉々も御打の者なり。

板垣退助書状（封書）

(表書)

愛知県三河国西加茂郡上郷村
浦野錠平殿

茶丸の消印

伊勢津 廿五年二月 十日 二便

黒丸の消印

三河四鄉 廿五年二月十二日 一便

(裏書)

三重県安濃津入江町
大観亭ニテ

板垣退助
メ印 赤

印赤

浦野酒造に残る板垣退助の書状

下古屋の浦野酒造に板垣退助の手紙が保存されている
三重県津市入江町にある料亭「大観亭」より出されたもので
宛先は愛知県三河国西加茂郡上郷村の浦野錠平、日付は明
治25年（1892）2月10日。

手紙には板垣退助が2月初旬に四郷に立ち寄り、浦野家で接待を受けたことへの感謝の言葉が綴られている。さらに、自身が率いる「自由党」の勢力拡張に向けた決意が示されており、当時30代前半であった浦野錠平に対する期待が込められている。浦野錠平はこの時、家業の清酒醸造に取り組む一方で、西加茂郡の郡会議員を務めていた。追伸には手紙が出された日の5日後、2月15日に迫った第2回衆議院議員総選挙について、錠平に地域の票固めを依頼している。

明治22年（1889）2月11日に公布された大日本帝国憲法および衆議院議員選挙法に基づき、第1回衆議院議員総選挙が実施されたのは翌23年7月1日。第1回帝国議會は明治24年12月25日に解散しており、この年、板垣退助は「立憲自由党」から党名を改めた「自由党」党首に就任していた。第2回衆議院議員総選挙では自由党が第一党になれるかの瀬戸際であったが、結果は「自由党」が94議席を確保し、第一党となっている。

浦野銳平はこの手紙から2カ月後の4月には県会議員となり、明治31年（1898）3月には37歳で衆議院議員に当選。その後42歳まで衆議院議員として帝国議會で活躍した。

伊能忠敬測量隊が四郷に滞在

日本全土の地図を作成した江戸後期の地理学者・伊能忠敬一行が四郷へ滞在した際の対応を記した古文書を豊田市郷土資料館が発見した。古文書は挙母城下で庄屋を務めた鈴木家に残っていたもので、忠敬測量隊がやってきた文化8年（1811）3月19日から4月3日までの出来事が詳しく書かれている。表紙は「天文測量方御通行取計向留帳」。

名古屋・平針に前泊した忠敬一行は二手に分かれ、一方は3月25日、四郷村の庄屋・磯右衛門宅に泊まった。古文書によると、庄屋宅ではこの時に昼夜朝の料理を供しており、鯛やすずきのほか、かまぼこ、焼き豆腐、卵などが並ぶ。山うどや蕨、落といった季節の山菜も含まれており、精いっぱいもてなした様子がうかがえる。四郷村がこの一晚の接待に使った費用は銭19貫401文(3両程度)で、現在の貨幣価値に換算すると16万円ほど。四郷村では食材の買い出しに岡崎まで走ったり、献立について拳母藩に聞き合わせをしたりしている。また、寝ずの番や測量の手助けなども含め、351人が駆り出されたとある。もともと、この351人という数字はあまりに多すぎるのではないかと研究者は指摘している。

しかし、丁重にもてなされたことは間違いない。挙母の郡奉行所から村々に出された触書には部屋に置く机や硯、燭台の数のほか、出迎えの者の服装に至るまで細かい指示が書かれている。

延命寺(四郷町六反田)

曹洞宗（ご本尊は地藏菩薩。寛永7年（1630）に浦野溝
 造、浦野十三の寄進により建立。当時は「十王堂」と称され、
 浦野家の礼拝堂として維持
 管理されていた。寛延4年
 （1751）に作られた村地
 図にも「十王堂」との記載が
 ある。昭和15年（1940）
 に十王山延命寺と改称され、
 現在に至る。毎年2月4日に
 大般若転讀法会、8月4日
 に大施餓鬼法会が行われる。



延命寺の弘法さん（四郷町六反田）

もとはお鍛山にあった弘法さんの石仏が祀られている。昭和38年（1963）にお鍛山の土地所有者が変わったため移転する必要があり、当時の延命寺住職であった仙定尼和尚のご好意によって境内の一角に故・梅村針次氏寄進のお堂が建てられた。平成29年（2017）3月の区画整理事業により現在の場所へ移動。毎年弘法大師の縁日である旧暦3月21日に祭りが行われている。



■ 水無瀬川桜並木（四郷町・井上町）

水無瀬川は以前「唐沢川」と呼ばれていたが、上流の開拓によつて水がほとんど無くなり、現在の名で呼ばれるようになった。



昭和58年（1983）から河川改修が行われ、両岸に順次植えられた桜の木が今では300本近くになっている。運動公園から井上公園まで遊歩道が整備され、春は大勢の人が散策を楽しむ。遊歩道沿いには「アゲハチョウ観察公園」がある。

旧・飯田街道と道標（四郷町山畑）

道は天道へと延び、南北に走る柿野街道と山畑で交差する。そこに嘉永3年(1850)に建てられた花崗岩の道標がある。そこに「右・伊勢宮名古屋道」「左・善光寺道」、もう一面には「左・岡崎道」と判読される。この北40メートルにも道標があったが、豊田市郷土資料館に移築された。





1986年に開館された「猿投棒の手ふれあい広場」



棒の手キャラクター



四郷棒の手
2023動画



天道棒の手
保存会HP



四郷地区棒の手
保存会HP



下古屋地区の棒の手



四郷八柱神社鳥居



四郷八柱神社

御一新により八王子大明神から 八柱神社に改称

天忍穂耳命(あめのおしほみのみこと)をはじめ8柱を祀る四郷八柱神社は古来「八王子大明神」と称し、籠川の東堤防に接する辺りに鎮座していた。しかし、籠川がたびたび氾濫を起こしていたため明暦5年(1656)に四郷村与茂田の八幡神社境内に仮遷座し、天保4年(1833)に現在の場所へ移る。なお、八柱神社があったことから籠川左岸堤防東側一帯の地名が「宮下河原」になったそうだ。

明治3年(1870)12月、四郷村は孝母藩に「神社祭号其外明細帳」を提出し、村内の神社名と祭神、本殿、拝殿の規模、神社境内面積、祭日、勧請年月等を報告している。この文書には八柱社、八幡宮、素差鳴社、秋葉社(東山)、一王子社、秋葉社(上原西山)の6社が記載され、四郷村の氏神(産土神)である八柱神社については御一新によって「八王子大明神」の呼称を「八柱社」に改称したとある。これは、明治元年(1868)に出された神仏判然令(神仏分離令)に対応したものとみられる。文書には四郷村の村役人であった庄屋鈴木藤治郎、組頭加藤勝平、浦野常助、山田満吉、百姓代浦野鉄治郎の5名が連名で記されている。

秋には五穀豊穣を願う「棒の手警固祭り」が行われ、愛知県無形民俗文化財に指定されている「棒の手」が奉納される。

戦国時代から続く民俗芸能「棒の手」

「棒の手」は農民の自衛手段であった棒術が大永3年(1523)ごろ尾張の岩崎城下で槍・長刀・鎌・太刀などを加えた武技となり、やがて神事芸能に変容したとされる。四郷地区で「棒の手」が盛んに行われたのは江戸中期から明治にかけて。「四郷棒の手保存会」作成の資料によると、昭和3年(1928)の昭和天皇の即位を祝う御大典祭に四郷、花本、御船、荒井、越戸地区が連合して警固祭りを行つて以降、太平洋戦争後まで活動が途絶えた。復活するのは「棒の手」が愛知県の無形民俗文化財の指定を受けた昭和33年(1958)以降。翌34年、後の「四郷棒の手保存会」初代会長に福岡金弥氏が就任。

「棒の手」には流派があり、天道に伝わる鎌田流は天正3年(1575)、岩崎城主・丹羽勘助忠次の家臣・鎌田兵太寛信が農具を用いて野武士や野盗に対抗する技を編み出し、農民を指導したのが始まりとされる。天道地区は昭和35年(1960)に杉浦直一氏、近藤龍次氏、杉山藤一氏、福岡栄氏、鳥山良氏、杉浦幾太郎氏、今井一郎氏の7名が発起人となり「棒の手」復活に乗り出した。この頃には「棒の手」に精通する人が地域におらず、鎌田流を伝える宮口一色と猿投の下切に指導を頼むことになったという。なお、平成6年(1994)から女子が参加し、平成18年(2006)には愛知県初の女子の目録取得者を3名輩出している。

下古屋地区の流派は藤牧検藤流で、尾張の今村(現・瀬戸市)から保見地区の篠原を経由して伝わった。剣術を得意とし、演目には無双槍・十手槍・鎖鎌、白龍(2人で刀を扱う)などがある。

観音堂と弘法さん(四郷町山畑)

お嶽山にあった弘法さんの石仏のうち、天道の分が安置されている。弘法大師の縁日である旧暦の3月21日に祭りが行われている。観音堂は四郷村戸長役場であったが、明治22年(1889)の上郷村との合併で村役場が花本に置かれるようになると、以後は四郷区の集会所として使われていた。



秋葉山常夜燈と火の見櫓(四郷町山畑)

天道・秋葉山常夜燈は享和3年(1803)の建立。総本山である秋葉山本宮秋葉神社の大祭が12月15日であることから、大祭日前後になると「秋葉講」の代参者が本宮にお参りしてお札を受け、講組の各家庭に配る。火の見櫓は昭和30年(1955)に地元有志16名により建てられ、平成21年(2009)に塗装されるなど大切に保存されている。



雲龍寺(四郷町山畑)

雲龍寺は水月山雲龍寺といい、聖観世音菩薩を主本尊とする曹洞宗の寺である。寛永4年(1627)までは衣村(現・錦町)にあったが、矢作川の氾濫に遭い四郷村寺河原(現・宮下河原)へ移転した。その後、籠川の洪水によりさらに高台を求め、明暦2年(1656)になって現在地に移った。今の本堂は大正11年(1922)に再建された。



四郷村宝暦義民供養塔(四郷町山畑)

宝暦2年(1752)、孝母城主・内藤丹波守政苗の治政下で重税に苦しんだ村人たちが年貢の減免を訴え出た。申し立ての一部は認められたものの、越訴は「大罪」であったため代表者6名が孝母で処刑された。四郷村からは小栗紋右衛門、山田林右衛門が犠牲となった。安永8年(1779)の27回忌法要の際に雲龍寺境内に供養塔が建立され、毎年5月に供養が行われている。



井郷ぐるっと
見て歩き

